

---

# 思い出

光咲まこと

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

思い出

### 【Nコード】

N2267D

### 【作者名】

光咲まこと

### 【あらすじ】

それは多分。思い出を語るには、早すぎて。思い出を振り返るには、浅い。俺たちは生まれてまだ、二十数年。作られた思い出はまだ、色鮮やか。

温かな陽が差し込む部屋で、目を閉じて思い出す。  
あれは…いつのことか。  
まだ昨日のことのようで、もう過ぎ去ってしまった昨日。

「…思い出を…話そうか」

それは、多分。

思い出を語るには、早すぎて。

思い出を振り返るには、浅い。

生まれてまだ、二十数年。

思い出はまだ、色鮮やか。

「…例えば、ボクらはいつも一緒だったね。どの思い出にも、キミが居た」

例えば、俺の中にも必ず、お前が居て。

同じものを見て、同じものを思って、同じものに悲しんだ。

双子じゃないのに、不思議なくらい同じものが多かった。

全ての偶然は、同じ日に生まれたことから始まったのかもしれない。  
い。

同じ日、同じ病院で、ほぼ同時に産声をあげた俺たち。

退院してみれば、同じ方向。

お隣同士だった。

思い出

「…でも、一つだけ違うものがあった。どうやっても、同じになら

なかった」

たった一つだけ違うもの。

家庭環境までは、同じではなかった。

全くの、正反対。

俺の家は円満で、お前の家は破滅で。

お前がどんなに頑張っても、俺の家のような幸せが訪れなかった。今も、昔も変わらない。

思い出を美化することも出来ないくらい、大きな傷跡を作っている。

増え続け、収まることを知らない傷。

誰かが癒すこともなく、誰にも癒せなかった。

もちろん、幼馴染の俺も例外ではない。

知っていても、何も出来なかった。

子供は、何て無力なんだ。

そして大人になっても、無力は変わらず。

「…幸せだと言えば、嘘になる。けど、幸せじゃないとも言いきれない。そんな世界だった」

笑うのは、幸せだからだろうか。

それとも、笑えば幸せだと思うからか。

今、幸せだろうか。

思い出はそうじゃないとしても。

この瞬間、幸せだろうか。

俺は今、幸せじゃないかもしれない。

幸せを掴んで、進んでいこうとしているのに、そう思ってしまう。ポツリと、涙が零れた。

## 思い出

「…キミは、泣き虫だったね。どうしてか、ボクが笑うと泣いた。

今も…ね」

泣けない、お前の代わり。  
人のために泣いたことなんて、一度もなかったあの頃。  
初めて泣いたのは、傷だらけのお前を見た時だ。  
それでもお前は笑うから、俺が泣いた。  
痛くて。

イタクテ。  
心が、痛みにしかな反応しなくなったのか、掴んだ幸せに泣けなくて。

みんなを困らせたな…。  
今も、お前を困らせているに違いない。  
締め付けられるほど、痛くて。  
涙が止まらなかった。

「…お願いだから、笑ってよ。思い出を、笑顔で飾らせて…」

その言葉で、涙腺が一気に緩んだ。  
落ちる涙に、堪える嗚咽。  
滲んだ視界は、俺を不安にさせる。  
お前が見えない。  
消えてしまったんじゃないかと、錯覚してしまう。  
拭っても、溢れ出す量が多すぎて追いつかない。  
想いと、心は裏腹。  
笑ってやりたいという想いと、悲しいと感じる心と。  
グチャグチャだった。  
どちらが本当の俺で、どちらも本当の俺で。  
何もかも、分からないほど。

思い出

「ボクは……ボクは、最後の時もキミが居てくれたことが、何より

も嬉しかった…」

最後の時…。

生まれてまだ二十数年。

終わるには、まだ早すぎる二十数年の時間。

お前の人生は、最後まで傷だらけだ。

両親のことも、自分自身のことも。

身体の異変を知った時には、すでに手遅れだった。

ガンと言う、ある意味では不治の病。

末期…だったのだ。

それは、俺が幸せを…結婚と言う幸せを掴んだ時に訪れた、正反対のことだった。

式まであと僅か。

医師から告げられた先刻も、あと僅か。

だから俺たちは、思い出を語る。

残された時間を、唯一無二の親友と。

今、刻んでいる。

「…家でどんな仕打ちをされても、必ずキミが居てくれたから…」

でも、それは本当に助けになったのか分からない。

何も出来なくて。

何もしてやれなくて。

ただ、ただ、泣くしか出来なかった。

「…キミは、荒んだ中の光で…側にキミが居るだけで、ボクは絶望に落ちることはなかった」

光は、お前だと思う。

この幸せを掴むまで、いろいろな挫折を味わってきた。

社会人になって初めての大きなプロジェクト。  
寝る間も惜しんで作り上げた計画は、先輩の手柄になり。  
押し寄せるリストラの波に怯える日々。  
まだ若いから、次の職があるというけれど、本当は次の職なんて  
簡単に見つからないんだ。

そして最大の挫折は、高校時代から付き合っていた彼女にフラれたこと。

好きだった。

愛していた。

結婚したいと思っていたのに、ダメだった。

理由は今でも分からない。

無気力になりかけた俺を救ったのは、やっぱりお前で…。

まさに、絶望から救い上げる光、だった。

「…キミの輝いている姿は、ボクの誇りだ。ボクはキミの幼馴染なんだと自慢したいほど」

俺も、誇りに思う。

俺はこんなにも思われているんだと。

お前は、最高の幼馴染であり、一番の親友なんだ。

こんな素晴らしい幼馴染は、世界中探したってそうは居ない。

俺の手に、人生で最高の幼馴染と、最高のパートナーが居る。

幸せのボルテージはきつと、最高潮だろう。

みんな、お前のおかげだ。

海よりも深く。

山よりも高く。

空よりも遠く。

それは何にも例え難いこと。

とても、とても、感謝しているんだ…。

「本当に、泣き虫だね」

だから、分けない。

だから、返したい。

だけど、何も出来ない。

お前のいい所を思い出し、笑おうと思ったけど…。

辛い、現実。

夢にもならない今。

ふとした瞬間に、やっぱり泣いてしまう。

「…最後にキミが居たのが幸せだけど…やっぱり、心残りがあるんだ…」

そうだ。

俺にも、心残りがいっぱいある。

まだ、話したいことがあった。

まだ、聞いて欲しいことがあった。

まだ、感謝をしていないんだ。

俺がどれだけ救われたか、『ありがとう』を言っていないから。

全ての『ありがとう』が言えるまで、まだ…ここに…。

言わせてくれ。

「…けど…少し、疲れたかな…今日は夢で、心残りを見たいな…」

瞼が、ゆっくりと閉じられて行く。

まだ眠るなど、我が俣は言えないのは、お前のため。

疲れたのなら、休ませてあげたいし。

そのお前に、『おやすみ』とは告げてはいけない。

それは、永遠の別れの言葉。

だから、

また…明日な。

「……また……あし、た……」

また明日会えるように。

明日がまた、来るように。

願いを、この一言に込める。

またね、に託す。

繋ぎ、繋ぎ止めようと。

僅かな光を信じて…。

『また、明日』

もう一度、言う。

明日。

閉じられた瞼は、二度と開くことはなかった。

思い出は、ここで途切れる。

お前に『明日』はなく、俺に訪れた『明日』は、灰色に見えた朝だった。

それから、どれくらいの月日が過ぎたのか。

あの時の『心残り』が何なのか、今でも考える。

思いつくのは、俺もお前も、心の底から笑うことが出来なかったことだ。

思い出

夢で、見られたのだろうか。

『また明日』が訪れたなら、聞きたい。聞かせて欲しかった。一つ、また一つ。

心残りが、増えていく。

失ってから、今日までずっと。

だけでももう、それも終わりだ。

もうすぐ、お前の居る場所へ行く。

行ったら、俺の心残りを告げよう。

そして、思い出を語ろう。

止まってしまった時と。

俺だけが進んでしまった時と。

この世界で、語りつくしてしまった話を。

伝えたい。

温かな陽が差し込む部屋で、目を閉じて思い出す。

それは…いつのことか。

まだ昨日のことのようで、もう過ぎ去ってしまった昨日。

生まれてもう、云十年。

思い出を語るには、十分で。

思い出を振り返るには、長く。

随分と色褪せてしまったけど、消えてしまうほどじゃない。

話せばまた、色付くから。

途切れたそこから、

「…続きを、話そうか…」

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2267d/>

---

思い出

2009年3月24日09時41分発行